

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Individualistic and collectivistic values as predictive/explanatory variables of communication orientation : Filipino workers and university students

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2007-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 守崎, 誠一, Morisaki, Seiichi メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/605

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



対人コミュニケーション行動の予測・説明 変数としての個人主義／集団主義的価値観

—フィリピンの社会人と大学生について—

守 崎 誠 一

0. はじめに

Hofstede (1980, 1983, 1991) や Triandis (1994, 1995) らの研究に代表されるように、人の行動や考え方の文化的な違いを予測・説明する変数として、これまで「個人主義／集団主義」が多用されてきた。しかし、近年になって個人主義／集団主義の概念に「垂直的／水平的」という新たな次元を加えた「垂直的個人主義」「水平的個人主義」「垂直的集団主義」「水平的集団主義」の4つによって文化をとらえるべきとの主張が出てきている (Gelfand & Holcomb, 1998; Triandis & Gelfand, 1998)。本論稿では、フィリピン人の社会人と大学生を対象に質問紙調査を実施して、コミュニケーション行動を予測・説明する変数として、それら4つの文化的変数の有効性について検証をおこなう。その際、近年比較文化研究の際に考慮すべき要因として注目され始めている「準拠集団効果」(Heine, Lehman, Peng, Greenholtz, 2002; 竹村・結城, 2002) の影響についても検討をおこなう。

1. 個人主義／集団主義

Hofstede (1980, 1983, 1991) は、国や地域によって仕事に関する価値観がどのように異なっているのかを明らかにする目的で、全世界に展開するIBMの支店を使って大規模な調査を実施した。具体的には、1968年から1972年までの間に、50の国と3つの地域（アラブ、西アフリカ、東アフリカ）で

働く約12万人の IBM 社員を中心とする被調査者からデータを集め、仕事に関する文化的価値観として (a)権力格差 (power distance), (b)不確実性回避 (uncertainty avoidance), (c)個人主義／集団主義 (individualism/collectivism), (d)男性的価値／女性的価値 (masculinity/femininity)」の4つを抽出した。これら4つの文化的変数のうち個人主義／集団主義は、その後の Triandis らによる心理学的な側面からの実証的研究 (Triandis, 1994, 1995などにまとめがある) に伴い、「個人的な交流からビジネスや政治における交流にいたるまで」(トリアンデイス, 2003, p.14), さまざまな場面におけるコミュニケーション行動の文化的な違いや、その違いによって生じる摩擦を説明するために利用されるようになった。Triandis によると、

とりあえず集団主義は、親密に結びついた人々 (つまり、自分を1つ以上の集団 (家族, 仕事仲間, 一族, 国) の一部と見なし、主に集団の規範や集団から課せられた義務に動機づけられ、自分自身の目標よりも集団の目標を優先させ、また集団においてメンバーの団結を重視する人々) が織りなす社会的パターンと定義できるであろう。また個人主義もひとまずは、穏やかに結びついた人々 (つまり、自分は集団から独立していると見なし、主に自分の好み・要求・権利・他者との間で結んだ契約に動機づけられ、他者の目標よりも自分自身の目標を優先させ、他者と関係をもつ際にはまずそうすることの利点・欠点を合理的に判断することが重要と考える人々) が織りなす社会的パターンと定義される。(トリアンデイス, 2003, p.2)

しかし、近年そのような研究に対して、いくつかの問題点も指摘されている。具体的には、個人主義／集団主義を測定するための (a) 尺度の概念的等価性, (b) 尺度の妥当性, (c) 尺度の機能的等価性, (d) 尺度の翻訳の等価性, (e) 尺度の計量的等価性, (f) 被調査者の代表性および調査対象国の偏り, (g) 調査からの経年変化, などに関する問題が指摘されている (岩脇, 199; 高井, 1999; 高野・櫻坂, 1997; 守崎, 2000, 2004)。これに対

して、文化によって個人主義／集団主義の表われ方（i.e., 人々の考え方、感じ方、行動の仕方）には違いがあって、そのような多様な違いを個人主義／集団主義という一次元だけでとらえることそのものの限界を指摘している研究者もいる。例えば、Triandisら（Singelis, Triandis, Bhawuk, & Gelfand, 1995; Triandis, 1995; Triandis & Gelfand, 1998）は、個人主義／集団主義を構成する概念として、これまでのような個人が他者と相互に「独立的」であるか、それとも相互に「依存的」であるかという次元に加えて、人々が相互に「異質的（垂直的）」であることを積極的に認めようとするのか、それともできるだけ「同質的（水平的）」であろうとするのかという新たな次元の導入を提案している。つまり、それら2つの次元を組み合わせることで、「垂直的個人主義」「水平的個人主義」「垂直的集団主義」「水平的集団主義」の4つの側面からの研究の必要性を主張している。

2. 文化普遍的尺度を使った個人主義／集団主義的価値観の測定と文化比較

守崎（2004）は、日本・アメリカ・中国・フィリピン・マレーシアの5カ国の社会人と大学生を対象に、文化的に普遍性の高い Gudykunst, Matsumoto, Ting-Toomey, Nishida, Kim, & Heyman（1996）の個人主義／集団主義に関する100の価値観（分析に使用されたのは98）を使って、これまでの先行研究で指摘されていた問題点をできるだけ排除、もしくは小さくした質問紙調査を実施している。分析の結果、Triandisら（Singelis et al., 1995; Triandis, 1995; Triandis & Gelfand, 1998）が主張する「垂直的個人主義」「水平的個人主義」「垂直的集団主義」「水平的集団主義」に相当する4つの因子を抽出している。

守崎（2006）は、日本人大学生とアメリカ人大学生を被調査者とする質問紙調査を実施し、調査実施日前の1週間の間に体験したコミュニケーション行動（学校を離れた後の時間に限定）について「誰と」「何を」「どれ位の時

間費やしたか」,そして「その行動がどれほど重要であるか」を回答させ、守崎（2004）の研究により抽出された4つの因子との関連を検証している。その結果、日本人大学生とアメリカ人大学生のコミュニケーション行動の文化的な違いを説明・予測する文化的変数には、「水平的集団主義」を除く「垂直的個人主義」「水平的個人主義」「垂直的集団主義」の3つの可能性があること。そして、コミュニケーションの相手が「誰か」ということよりも、コミュニケーションの「内容」がどのようなものであるかの方が、より予測・説明できること。しかし、その対象は限定的であり、なおかつ予測・説明変数として有意となったものでも、その量は極めて少ない（i.e., いずれの決定係数についても .10以下）ことを明らかにしている。

このような結果となった原因のひとつとして、守崎（2006）は「準拠集団効果」の影響を指摘している。準拠集団効果とは、「集団間の比較をする際に、客観的な指標でなく、各集団成員の集団内での相対的な自己評価を指標として用いることで、現実の差異が結果に反映されないことを言う」（竹村・結城, 2002, p.142）。具体的には、守崎（2006）の研究において日米の被調査者は、「垂直的個人主義」「水平的個人主義」「垂直的集団主義」「水平的集団主義」に関連する100の価値観（分析に使用されたのは98）に対して、「毎日の生活における生きる指針として、どの程度重要であるかどうか」を「重要でない（1）」から「大変重要である（7）」までの7段階評定によって回答した。しかし、この場合「どの程度重要であるかどうか」を判断する客観的な基準は存在せず、各被調査者は内集団の他者との比較（i.e., 社会的比較）によって評価をおこなったことになる。その場合、もし日米間で客観的な平均が異なっていたとすると、相対的評価の基準が文化によって異なっていたことになる。具体的には、例えば日本人大学生の「水平的集団主義」がアメリカ人大学生に比べて全体的に高かったと仮定した場合、ある日本人とアメリカ人の「どちらでもない（4）」という回答は、それぞれの文化内部での相対的な評価としては正確であったかもしれないが、客観的な評価としては不

正確であった（日本人の平均的な人は、アメリカ人の平均的な人よりも高い）ことになる。つまり、文化的価値観などを質問紙によって評定させる方法は、相対的評価の基準が共有されている同一文化内の個人差を比較するのには有効であっても、基準の異なる文化間の平均の比較には不適當であることになる。

3. 本研究の目的

本研究の目的は、これまでの個人主義／集団主義尺度が持つ問題点をできるだけ排除、もしくは小さくした質問紙を使うことで守崎（2004）により抽出された4つの文化的変数を尺度として使用し、それらがコミュニケーション行動の文化差を予測・説明する変数としてどれほど有効であるのかを、守崎（2006）が用いた日米の大学生とは異なる属性を持つ被調査者を用いてさらなる検証をおこなうことにある。その際、守崎（2006）の研究とは異なり、同一文化内の異なる属性を持つ2群を比較することで準拠集団効果を統制した中で4つの文化的変数の予測・説明変数としての有効性を検証する。具体的には、フィリピン人の社会人と大学生を被調査者に用いて、コミュニケーション行動の比較をおこなうと共に、そこに現れたコミュニケーション行動の違いを4つの文化的変数がどれだけ予測・説明できるかについて検証する。

4. 方 法

4.1. 被調査者

フィリピンの社会人と大学生の計118名（男性42名、女性76名）に対して質問紙調査をおこなった¹⁾。調査は、フィリピン国内の複数の企業および国立フィリピン大学の協力を得ておこなった。社会人と学生の比較に際しては、「フルタイムの勤労者」「フルタイムの勤労者であり、パートタイムの学生」「パートタイムの勤労者」「パートタイムの学生であり、パートタイムの勤労者」「フルタイムの学生であり、フルタイムの勤労者」の5つのカテゴリーに属する被調査者を社会人とし、「フルタイムの学生」「フルタイムの学生で

あり、パートタイムの勤労者」「パートタイムの学生」の3つのカテゴリーに属する被調査者を学生とすることとした。²⁾その結果、社会人は56名（男性23名、女性33名）、学生は62名（男性19名、女性43名）となり、それぞれの年齢の平均は社会人36.41歳（ $SD=11.29$ ）、学生18.84歳（ $SD=1.93$ ）となった。

4.2. 質問紙および調査の手続き

質問紙は英語で作成された。フィリピン人の被調査者に対して英語の質問紙を使用した理由として、フィリピンでは母語として主なものだけでも Cebuano, Tagalog, Ilocano, Ilongo, Bicolano, Waray-Waray, Kapampangan, Pangashinan などが用いられており、それら全ての言語の質問紙を準備することは極めて困難であるし、学校教育では長い間英語が公用語として用いられてきたため、多くのフィリピン国民が母語と英語のバイリンガルであることを考慮して英語の質問紙を使用することにした。

4.2.1. 個人主義／集団主義の測定 すでに述べたように守崎（2004）は、日本・アメリカ・中国・フィリピン・マレーシアの5カ国の社会人と大学生を対象に、これまでの先行研究に見られるさまざまな問題点をできるだけ排除、もしくは小さくしたGudykunst et al.（1996）の個人主義／集団主義に関する100の価値観（分析に使用されたのは98）を使った質問紙調査を実施し、個人主義／集団主義的価値観の潜在因子として「垂直的個人主義」「水平的個人主義」「垂直的集団主義」「水平的集団主義」の4つの因子を抽出している。本研究では、それら4因子を尺度として使用することにした。尺度としての信頼性を検証するためにクロンバックのアルファ係数を求めたところ、垂直的個人主義（社会人=.76, 大学生=.71）、水平的個人主義（社会人=.88, 大学生=.92）、垂直的集団主義（社会人=.70, 大学生=.63）、水平的集団主義（社会人=.82, 大学生=.78）となった。いずれについても比較的高い値を示しており、尺度としての信頼性は確保されていると言える。

4.2.2. コミュニケーション行動の測定 被調査者に対して、調査実施日前の1週間の間に体験した出来事とコミュニケーション行動（職場・学校を

離れた後の時間に限定) について「誰と」「何を」「どれ位の時間費やしたか」を自由記述で回答させ、そして「その行動がどれほど重要であるか」を「まったく重要でない (1)」から「たいへん重要である (7)」までの 7 段階評定で回答させた。

4.2.3. デモグラフィックな情報に関する質問 分析に必要な被調査者のデモグラフィックな情報について尋ねた。具体的には、被調査者の年齢、性別、国籍、人種的背景、宗教、就学・就職の有無を回答させた。

5. 結 果

5.1. 4 つの文化的変数の社会人と大学生の比較

フィリピン人の社会人および大学生の「垂直的個人主義」「水平的個人主義」「垂直的集団主義」「水平的集団主義」の平均と標準偏差、相関は表 1 と表 2 に示すような結果となった。フィリピン人の社会人と大学生の間に違いがあるかどうかを確かめるためにそれぞれについて t 検定をおこなった。その結果、4 つの文化的変数すべてについて有意な違いは明らかとならなかった：垂直的個人主義 ($t=.30$, $df=113$, ns), 水平的個人主義 ($t=1.94$, $df=114$, ns), 垂直的集団主義 ($t=.37$, $df=113$, ns), 水平的集団主義 ($t=.17$, $df=113$, ns)。ただし、水平的個人主義については有意傾向

表 1 : 4 つの文化的変数の平均 (SD)

	社会人	大学生
垂直的個人主義	5.55(.68)	5.60(.70)
水平的個人主義	6.30(.49)	6.10(.65)
垂直的集団主義	4.87(.72)	4.82(.75)
水平的集団主義	6.18(.66)	6.16(.63)

表 2 : 4 つの文化的変数の相関

	1	2	3	4
1. 垂直的個人主義	1.00			
2. 水平的個人主義	.33***	1.00		
3. 垂直的集団主義	.42***	.46***	1.00	
4. 水平的集団主義	.51***	.62***	.53***	1.00

*** $p < .001$

($p=.055$)が見られ、大学生よりも社会人のほうが高い傾向を示した。

5.2. コミュニケーション行動の社会人と大学生の比較

被調査者に対して、調査実施日前の1週間の間に体験した出来事とコミュニケーション行動（職場・学校を離れた後の時間に限定）について「誰と」「何を」「どれ位の時間費やしたか」を自由記述で回答させた。「誰と」の回答結果については、守崎（2006）の分類を援用して表3に示すような14のカ

表3：相手別の平均時間と平均重要度(SD)

	社会人(n=56)				大学生(n=62)			
	度数人	平均時間分	度数人	平均重要度	度数人	平均時間分	度数人	平均重要度
配偶者	28	309.00(229.12)	29	6.78 (.53)	0		0	
子供・孫	25	220.6 (167.79)	28	6.48 (.76)	4	62.50 (37.75)	2	5.00(1.41)
家族	21	440.95(602.16)	22	6.40 (.66)	23	382.61(423.52)	21	6.10(1.30)
兄弟姉妹	23	204.61(246.98)	23	5.75(1.14)	44	205.50(139.64)	44	6.20(1.02)
父母	17	279.12(268.57)	15	6.08(1.19)	48	352.65(674.65)	48	6.48 (.87)
祖父母	1	45.00	1	7.00	7	52.14 (34.02)	5	6.30 (.84)
親類	27	192.22(292.21)	27	5.70(1.30)	33	304.12(327.20)	31	5.17(1.32)
友人	45	348.67(343.08)	48	5.71(1.14)	58	561.81(633.24)	58	5.67 (.93)
恋人	2	240.00(169.71)	2	6.50 (.71)	20	377.85(337.84)	19	6.37(1.21)
信者仲間	8	117.50 (69.47)	6	5.33(1.37)	6	104.17 (85.70)	5	6.20(1.10)
知人	18	147.22(132.97)	17	5.34(1.51)	14	114.79(115.56)	10	4.75(1.09)
先生	2	45.00(21.21)	2	4.00	10	135.70(125.07)	9	5.44(1.24)
仕事・アルバイト仲間	19	242.95(227.21)	15	5.33(1.05)	6	66.67 (59.22)	4	3.50(1.91)
その他	16	203.75(156.17)	17	6.45 (.66)	14	127.93(217.33)	8	4.13(1.53)

表4：内容別の平均時間と平均重要度(SD)

	社会人(n=56)				大学生(n=62)			
	度数人	平均時間分	度数人	平均重要度	度数人	平均時間分	度数人	平均重要度
勉強について話す	11	131.36(120.67)	11	5.91(1.04)	21	165.62(187.32)	16	5.92(1.14)
勉強を一緒にする	18	198.33(131.47)	17	6.00(1.17)	21	258.57	18	5.72 (.97)
仕事・アルバイトについて話す	14	195.71(139.87)	16	6.53 (.72)	7	85.71 (89.09)	6	4.67(1.75)
仕事・アルバイトを一緒にする	9	228.44(225.79)	7	5.76(1.33)	7	82.14 (99.91)	4	3.75(2.22)
身の回りのことについて話す	43	433.30(428.36)	44	6.10 (.86)	57	311.60(323.94)	57	5.76(1.03)
家事を一緒にする	33	285.09(250.19)	31	6.03(1.10)	38	337.24(353.42)	34	5.94(1.14)
飲食を一緒にする	26	212.50(197.67)	22	5.53(1.20)	33	287.73(248.19)	31	5.76(1.03)
趣味・娯楽・余暇について話す	0		0		1	180.00	1	6.00
趣味・娯楽・余暇を共にする	45	466.51(538.91)	47	5.89(1.14)	57	689.88(838.76)	56	5.86 (.99)
宗教に関することを	12	122.50 (76.17)	12	6.50(1.17)	9	187.22(152.66)	9	6.00(1.12)

テゴリーにまとめて集計をおこなった。同様に、「何を」の回答については、表4に示すような10のカテゴリーにまとめて集計をおこなった。³⁾「誰と」と「何を」に関する回答を上記のカテゴリーにまとめるのに伴って、同一のカテゴリーに含まれることとなった「費やした時間」については、単純に加算することとした。これに対して、「重要度」については相加平均を求めた。フィリピン人の社会人と大学生の被調査者が1週間の間に費やした、相手別（誰と）と内容別（何を）の合計時間とその重要度の平均は、表3と表4に示すような結果となった。⁴⁾

5.2.1. 相手別のコミュニケーション時間の社会人と大学生の比較 相手別に費やした時間の合計を社会人と大学生で比較するためにウイルクソンの順位和検定をおこなった結果、「子供・孫 ($W=25.50, p<.05$)」「仕事・アルバイト仲間 ($W=46.50, p<.05$)」「その他 ($W=162.50, p<.05$)」については社会人の方が大学生よりも費やす時間が有意に長く、「友人 ($W=20014.00, p<.05$)」については大学生の方が社会人よりも有意に長いことが明らかとなった。また、「配偶者」については28名の社会人のみが時間を使っていた。しかし、それ以外の「家族 ($W=515.50, ns$)」「兄弟姉妹 ($W=693.50, ns$)」「父母 ($W=556.50, ns$)」「祖父母 ($W=31.00, ns$)」「親類 ($W=721.50, ns$)」「恋人 ($W=19.50, ns$)」「信者仲間 ($W=43.00, ns$)」「知人 ($W=206.50, ns$)」「先生 ($W=8.50, ns$)」については、有意な違いは明らかとならなかった。

5.2.2. 内容別のコミュニケーション時間の社会人と大学生の比較 内容別に費やした時間の合計を社会人と大学生で比較するためにウイルクソンの順位和検定をおこなった結果、「仕事・アルバイトを一緒にする ($W=52.50, p=.067$)」「身の回りのことについて話す ($W=26.4.50, p=.056$)」については有意傾向がみられ、どちらも社会人のほうが大学生よりも費やす時間が長い傾向があることが明らかとなった。また、「趣味・娯楽・余暇について話す」については、大学生の1名のみがおこなっていた。しかし、そ

れ以外の「勉強を一緒にする ($W=382.50$, ns)」「仕事・アルバイトについて話す ($W=44.00$, ns)」「家事を一緒にする ($W=1184.00$, ns)」「飲食を一緒にする ($W=717.00$, ns)」「趣味・娯楽・余暇を共にする ($W=2088.00$, ns)」「宗教に関することをする ($W=120.00$, ns)」については、有意な違いは明らかとならなかった。

5.2.3. 相手別の重要度の社会人と大学生の比較 相手別の重要度の平均を社会人と大学生で比較するためにウイルコクスの順位和検定をおこなった結果、「子供・孫 ($W=9.00$, $p<.05$)」「仕事・アルバイト仲間 ($W=21.50$, $p<.05$)」「その他 ($W=44.00$, $p<.001$)」については、社会人の方が大学生よりも有意に重要視することが明らかになった。また、「配偶者」については29名の社会人のみが回答をおこない、平均で6.78 ($SD=.53$) の重要度を示していた。しかし、これ以外の「家族 ($W=11086.00$, ns)」「兄弟姉妹 ($W=9303.00$, ns)」「父母 ($W=8872.00$, ns)」「祖父母 ($W=10611.00$, ns)」「親類 ($W=10384.00$, ns)」「友人 ($W=16991.00$, ns)」「恋人 ($W=9553.00$, ns)」「信者仲間 ($W=11186.00$, ns)」「知人 ($W=16844.50$, ns)」「先生 ($W=16936.00$, ns)」については、有意な違いは明らかとならなかった。

5.2.4. 内容別の重要度の社会人と大学生の比較 内容別の重要度の平均を社会人と大学生で比較するためにウイルコクスの順位和検定をおこなった結果、「仕事・アルバイトについて話す ($W=36.50$, $p<.05$)」については、社会人の方が大学生よりも有意に重要視することが明らかになった。同様に、「身の回りのことについて話す ($W=2656.50$, $p=.084$)」については有意傾向がみられ、社会人のほうが大学生よりも重要視する傾向があることが明らかとなった。また、「趣味・娯楽・余暇について話す」については1名の大学生のみが回答をおこない、6.00の重要度を示していた。しかし、それ以外の「勉強について話す ($W=151.00$, ns)」「勉強を一緒にする ($W=295.00$, ns)」「仕事・アルバイトを一緒にする ($W=15.00$, ns)」「家事を

一緒にする ($W=1103.00$, ns)」「飲食と一緒にする ($W=566.00$, ns)」「趣味・娯楽・余暇を共にする ($W=2841.00$, ns)」「宗教に関することをする ($W=82.00$, ns)」については、有意な違いは明らかとならなかった。

5.3. 4つの文化的変数がコミュニケーション行動に与える影響

「垂直的個人主義」「水平的個人主義」「垂直的集団主義」「水平的集団主義」が、コミュニケーション行動に与える影響を明らかにするために、それら4つの文化的変数を説明変数とし、「相手別の合計時間」「内容別の合計時間」「相手別の平均重要度」「内容別の平均重要度」それぞれを従属変数とする重回帰分析（一括投入法）をおこなった。その際、従属変数に用いた数値については、分布の非正規性を補正するために対数変換 ($\log_{10}(1+\text{回答値})$) してから用いた。

5.3.1. 相手別のコミュニケーション時間に対する4つの文化的変数の影響 「相手別の合計時間」を従属変数とする重回帰分析の結果、偏回帰係数が有意（少なくとも $p<.05$ ）になったのは、「先生」に対する「水平的個人主義」のみであった（表5参照）。また有意傾向（少なくとも $p<.1$ ）が見られたのは、「父母」に対する「水平的個人主義」と「先生」に対する「垂直的集団主義」であった。しかし、それ以外については、いずれの偏回帰係数も有意とはならなかった。

5.3.2. 内容別のコミュニケーション時間に対する4つの文化的変数の影響 「内容別の合計時間」を従属変数とする重回帰分析の結果、偏回帰係数が有意（少なくとも $p<.05$ ）になったのは、「勉強について話す」に対する「水平的集団主義」と「仕事・アルバイトと一緒にする」に対する「水平的個人主義」のみであった（表6参照）。また有意傾向（少なくとも $p<.1$ ）が見られたのは、「家事と一緒にする」に対する「水平的個人主義」と「趣味・娯楽・余暇を共にする」に対する「水平的集団主義」、そして「宗教に関することをする」に対する「垂直的集団主義」であった。しかし、それ以外については、いずれの偏回帰係数も有意とはならなかった。

表5：相手別のコミュニケーション時間に対する重回帰分析の結果

	配偶者	子供・孫	家族	兄弟姉妹	父母	祖父母	親類	友人	恋人	信者仲間	知人	先生	仕事・バイト仲間	その他
垂直的個人主義														
B	.02	-.06	-.31	-.22	-.25	-.07	-.15	.21	.12	-.14	-.18	.02	-.09	.12
β	.02	-.05	.18	-.13	-.15	-.11	-.09	.15	.08	-.16	-.14	.03	-.07	-.09
t	.17	.41	1.55	1.17	1.27	.94	.79	1.35	.74	1.34	1.20	.26	.64	.80
水平的個人主義														
B	.02	.08	.32	-.33	-.45	-.05	.23	-.13	-.19	.06	-.30	-.36	-.02	-.01
β	.01	.06	.16	-.17	-.22	-.07	.12	-.08	-.12	.06	-.20	-.37	-.02	-.01
t	.11	.43	1.25	1.39	1.78 [†]	.56	.97	.67	.98	.47	1.61	3.19**	.12	.07
垂直的集団主義														
B	.10	.06	.19	.22	.18	.02	-.12	.05	-.21	.07	.03	-.17	.04	.14
β	.05	.05	.12	.15	.11	.03	-.08	.04	-.16	.09	.02	-.21	.03	.11
t	.63	.41	.97	1.23	.97	.25	.66	.34	1.36	.71	.26	1.91 [†]	.28	.93
水平的集団主義														
B	.01	-.10	-.25	.20	.22	.09	-.12	.10	-.06	.00	.26	.19	.16	.05
β	.08	-.07	-.13	.11	.12	.13	-.07	.07	-.04	.00	.19	.12	.12	.04
t	.06	.96	.96	.81	.87	.94	.48	.48	.29	.02	1.38	1.59	.82	.28
R^2	.01	.01	.05	.04	.05	.01	.03	.04	.04	.02	.04	.39	.01	.02
$R^{\wedge 2}$	.03	.03	.02	.00	.01	.03	.01	.00	.02	.02	.00	.12	.03	.02

B = 偏回帰係数, β = 標準偏回帰係数, $t = t$ 値, R^2 = 決定係数, $R^{\wedge 2}$ = 自由度調整決定係数 $^{\dagger}p < .1$, $^*p < .05$, $^{**}p < .01$

表6：内容別のコミュニケーション時間に対する重回帰分析の結果

	勉強について話す	勉強に一緒にする	勉強を一緒にする	仕事・バイトについて話す	仕事・バイトと一緒にする	身の回りのことについて話す	家事を一緒にする	食を一緒にする	趣味・娯楽・余暇について話す	趣味・娯楽・余暇を共にする	宗教に関すること
垂直的個人主義											
B	-.05	-.02	-.01	.14	-.14	.20	-.07	.00	.06	.21	-.05
β	-.04	.12	.12	.12	-.14	.14	-.04	.00	.15	.15	-.04
t	.34	.12	.12	1.03	1.27	1.28	.37	.02	1.34	1.29	.36
水平的個人主義											
B	-.23	-.12	-.07	-.11	-.31	.12	.47	-.18	-.05	.06	.10
β	-.15	-.07	-.07	-.08	-.27	.08	.24	-.09	-.13	.04	.07
t	1.20	.55	.55	.63	2.16*	.61	1.89 [†]	.73	1.04	.30	.59
垂直的集団主義											
B	-.07	-.17	-.12	-.10	.16	.02	-.04	-.23	-.02	.02	.25
β	-.06	-.12	-.12	-.09	.17	.01	-.03	-.15	-.08	.02	.23
t	.49	1.01	1.01	.76	1.42	.11	.33	1.21	.66	.13	1.91 [†]
水平的集団主義											
B	.39	.17	.11	-.04	.09	.14	-.20	.35	.03	-.37	-.23
β	.29	.11	.11	-.03	.09	.10	-.11	.19	.10	-.25	-.19
t	2.05*	.74	.74	.23	.64	.70	.79	1.37	.71	1.78	1.33
R^2	.04	.02	.02	.02	.06	.07	.04	.03	.04	.04	.05
$R^{\wedge 2}$	.00	.00	.00	.01	.03	.03	.00	.01	.00	.00	.01

B = 偏回帰係数, β = 標準偏回帰係数, $t = t$ 値, R^2 = 決定係数, $R^{\wedge 2}$ = 自由度調整決定係数 $^{\dagger}p < .1$, $^*p < .05$, $^{**}p < .01$

表 7 : 相手別の平均重要度に対する重回帰分析の結果

	配偶者	子供・孫	家族	兄弟姉妹	父母	祖父母	親類	友人	恋人	人	信者仲間	知人	先生	仕事・バイト仲間	その他
垂直的個人主義	B β t	-.02 -.04 .35	-.06 -.10 .83	-.09 -.15 1.27	-.08 -.13 1.14	-.03 -.09 .76	-.06 -.11 .81	.04 .01 .94	.05 .10 .87	.00 .01 .05	-.08 -.24 2.09*	.00 .01 .05	.04 .12 1.09	.01 .03 .23	.04 .01 .07
水平的個人主義	B β t	-.04 -.07 .51	.12 .18 1.40	-.17 -.23 1.86	-.13 -.18 1.40	.01 .04 .30	.16 .23 1.82†	.00 -.02 .02	-.03 -.05 .37	-.08 -.13 -1.06	.00 .00 .01	-.08 -.13 -1.06	-.14 -.37 3.13**	-.02 -.05 .40	.07 .12 .94
垂直的集団主義	B β t	.05 .09 .75	.06 .11 .88	.09 .16 1.37	.10 .17 1.45	.00 .01 .04	-.03 -.06 .47	.02 .05 .40	-.06 -.14 1.21	.00 .00 .02	.03 .09 .73	.00 .00 .02	-.05 -.15 1.34	.01 .04 .31	.04 .08 .66
水平的集団主義	B β t	.09 .11 .74	-.07 -.12 .82	.11 .17 1.25	.06 .10 .71	.03 .10 .70	-.07 -.12 .85	.03 .07 .49	-.03 -.06 .41	.05 .11 .74	.01 .03 .18	.05 .11 .74	.05 .14 1.03	.02 .06 .40	-.05 -.09 .62
R^2 $R^{\wedge 2}$		.02 .02	.04 .00	.05 .02	.04 .00	.01 .03	.05 .01	.03 .00	.03 .00	.01 .03	.04 .01	.01 .03	.14 .10	.01 .03	.02 .02

B = 偏回帰係数, β = 標準偏回帰係数, $t = t$ 値, R^2 = 決定係数, $R^{\wedge 2}$ = 自由度調整済決定係数 $^{\dagger} p < .1$, $^* p < .05$, $^{**} p < .01$

表 8 : 内容別の平均重要度に対する重回帰分析の結果

	勉強について話す	勉強に一緒にする	仕事を一緒にする	仕事・バイトの回りのことについて話す	家事一緒にする	食を一緒にする	趣味・娯楽・余暇について話す	趣味・娯楽・余暇を共にすることをする	宗教に関することをする
垂直的個人主義	B β t	.00 .00 .02	-.01 -.02 .21	.04 .09 .76	-.02 -.05 .43	.07 .15 1.36	.06 .10 .84	.04 .10 .90	-.02 -.04 .35
水平的個人主義	B β t	-.02 -.03 .20	.00 .00 .02	.02 .03 .26	-.03 -.10 .78	.08 .14 1.13	-.06 -.09 .63	.04 .07 .59	.05 .08 .68
垂直的集団主義	B β t	-.01 -.20 .17	-.05 -.10 .79	-.07 -.16 1.32	.05 .18 1.47	.00 .00 .02	-.05 -.09 .78	.02 .07 .54	.09 .20 1.67†
水平的集団主義	B β t	.15 .27 1.96†	.02 .03 .18	-.01 -.02 .14	-.02 -.07 .47	.02 .05 .34	.06 .09 .63	-.04 -.09 .60	-.10 -.20 1.40
R^2 $R^{\wedge 2}$		.06 .02	.01 .03	.02 .02	.03 .01	.07 .04	.02 .02	.02 .02	.04 .60

B = 偏回帰係数, β = 標準偏回帰係数, $t = t$ 値, R^2 = 決定係数, $R^{\wedge 2}$ = 自由度調整済決定係数 $^{\dagger} p < .1$, $^* p < .05$, $^{**} p < .01$

5.3.3. 相手別の重要度に対する4つの文化的変数の影響 「相手別の平均重要度」を従属変数とする重回帰分析の結果、偏回帰係数が有意（少なくとも $p < .05$ ）になったのは、「信者仲間」に対する「垂直的個人主義」と「先生」に対する「水平的個人主義」のみであった（表7参照）。また有意傾向（少なくとも $p < .1$ ）が見られたのは、「兄弟姉妹」に対する「水平的個人主義」と「親類」に対する「水平的個人主義」であった。しかし、それ以外については、いずれの偏回帰係数も有意とはならなかった。

5.3.4. 内容別の重要度に対する4つの文化的変数の影響 「内容別の平均重要度」を従属変数とする重回帰分析の結果、偏回帰係数が有意（少なくとも $p < .05$ ）になったのは、「家事を一緒にする」に対する「水平的個人主義」のみであった（表8参照）。また有意傾向（少なくとも $p < .1$ ）が見られたのは、「勉強について話す」に対する「水平的集団主義」と「宗教に関することをやる」に対する「垂直的集団主義」であった。しかし、それ以外については、いずれの偏回帰係数も有意とはならなかった。

7. 考 察

本研究では、フィリピン人の社会人と大学生を被調査者とする質問紙調査を実施し、調査実施日前の1週間の間に体験したコミュニケーション行動（職場・学校を離れた後の時間に限定）について「誰と」「何を」「どれ位の時間費やしたか」（自由記述）、そして「それがどれほど重要であるか」（7段階評定）を回答させ、守崎（2004）の研究により抽出された「垂直的個人主義」「水平的個人主義」「垂直的集団主義」「水平的集団主義」との関連を検証した。

最初に、守崎（2004）が抽出した4つの文化的変数について、フィリピン人の社会人と大学生の間で違いがあるかどうかを検証した。その結果、「水平的個人主義」で有意傾向がみられ、社会人よりも大学生の方が高い傾向を示したが、それ以外の「垂直的個人主義」「垂直的集団主義」「水平的集団主

義」については、いずれも有意な違いは明らかとならなかった。このことは、フィリピン人の社会人と大学生のコミュニケーション行動に違いがあった場合でも、これら4つの文化変数がその違いを予測・説明できる可能性が低いことを示している。

次に、フィリピン人の社会人と大学生のコミュニケーション行動の違いを検証した結果、相手別のコミュニケーション時間については、「子供・孫」「友人」「仕事・アルバイト仲間」「その他」について、有意もしくは有意傾向を示した。また、「配偶者」については28名の社会人のみが時間を使っていた。これに対して、相手別の重要度については、「子供・孫」「仕事・アルバイト仲間」「その他」について有意な違いが明らかとなった。また、「配偶者」については29名の社会人のみが回答をおこない、平均で6.78 ($SD=.53$)の重要度を示していた。これらの違いが、「垂直的個人主義」「水平的個人主義」「垂直的集団主義」「水平的集団主義」によって予測・説明できるかどうかを検証するために、重回帰分析をおこなった。その結果、予測・説明変数としての偏回帰係数が有意となり、なおかつその正負が社会人と大学生の比較の結果と整合していたものはなかった。

内容別のコミュニケーション時間について、社会人と大学生で比較した結果「仕事・アルバイトを一緒にする」「身の回りのことについて話す」について有意傾向が見られた。また、「趣味・娯楽・余暇について話す」については、大学生の1名のみがおこなっていた。これに対して、内容別の重要度については、「仕事・アルバイトについて話す」と「身の回りのことについて話す」について、有意もしくは有意傾向を示した。また、「趣味・娯楽・余暇について話す」については1名の大学生のみが回答をおこない、6.00の重要度を示していた。これらの違いが、「垂直的個人主義」「水平的個人主義」「垂直的集団主義」「水平的集団主義」によって予測・説明できるかどうかを検証するために、重回帰分析をおこなった。その結果、予測・説明変数としての偏回帰係数が有意となり、なおかつその正負が社会人と大学生の比較の

結果と整合していたものは、「仕事・アルバイトを一緒にする」時間に対する「水平的個人主義」のみであった。

今回の調査結果全体から明らかになったことは、フィリピン人の社会人と大学生のコミュニケーション行動の違い（i.e., 「誰」と「どんなこと」をするのに「どのくらいの時間」を費やし、それを「どの程度重要」と考えるか）を説明・予測する文化変数として、「垂直的個人主義」「水平的個人主義」「垂直的集団主義」「水平的集団主義」は、ほとんど全ての場合において有効に機能しないということであった。このような結果は、守崎（2006）がおこなった日米の大学生を対象にした研究の結果と一致するものであった。しかし、守崎（2006）は、4つの文化的変数が予測・説明変数として有効に機能しない原因のひとつとして「準拠集団効果」の影響を挙げていたが、今回フィリピン人という同一集団内での相対的な自己評価に基づく社会人と大学生の比較において、日米の大学生の比較と同様の結果が得られたことは、準拠集団効果の影響が必ずしもその原因でないことを本調査結果は示している。つまり、人の行動が個人主義／集団主義などの潜在的内的属性によってコントロールされており、それが時間や状況を超えて比較的安定・一貫しているといった「特性論」の限界が、本調査結果からは強く示唆される。しかし、守崎（2006）の日米比較研究に用いられた被調査者の数が日米合わせて238名であり、今回のフィリピン人被調査者の数が社会人と大学生を合わせて118名であったことを考えると、その数は必ずしも十分であったとはいえず、今後より多くの被調査者を用いた研究をおこなっていく必要がある。

また、そのようにデータの数が十分でなかったため、守崎（2006）の研究と同様に「誰と」と「何を」を組み合わせたより精緻なカテゴリー（例えば、「父母と勉強について話す」など）に対する4つの文化的変数の影響を今回の調査において検証できなかった。しかし、同じ相手に対するコミュニケーション行動であっても、内容が異なれば費やす時間やその重要度に違いが生じることが考えられる。同様に、同じ内容のコミュニケーション行動であっ

ても、相手が変われば費やす時間やその重要度に違いが生じることが考えられる。そのため、今後の研究では、十分なデータ数を確保した上で、より精緻なカテゴリーに基づいた分析をおこなう必要がある。

そのほか、今回フィリピン人の社会人と大学生を比較の対象として用いたが、就職・就学の違いのみならず、そこから派生する年齢の違いや配偶者・子供・孫の有無など多くの属性の違いが含まれる結果となった。比較の対象となる属性以外のすべてを完全に統制することは困難であるが、今後の研究ではできるだけ統制をおこなったうえでの比較が必要である。

註

- 1) 本研究の調査は、1996年度～1999年度文部科学省科学研究費補助金(国際学術研究, 課題番号08041070 研究代表者西田ひろ子)と1999年度～2000年度文部科学省科学研究費補助金(基盤研究(A)(2), 課題番号11691092 研究代表者西田ひろ子)を受けての調査の一部として実施された。その際、質問紙の作成およびデータの収集について、日本大学国際関係学部の西田司教授に協力していただいた。協力していただいた西田教授に深く感謝いたします。
- 2) 「パートタイムの学生であり、パートタイムの勤労者」については、年齢の平均が比較的高いことなどを考えて、社会人に含めることとした。
- 3) 守崎(2006)では、カテゴリーの一つとして「付き合い・人間関係について話す」が含まれていたが、それに相当する回答がなかったため、本調査のカテゴリーには使用しなかった。
- 4) 相手別の「祖父母」「恋人」「先生」や内容別の「趣味・娯楽・余暇について話す」「仕事・アルバイトについて話す」「仕事・アルバイトを一緒にする」のように必ずしも分析に十分なサンプル数とはいえないものが含まれている。本研究は、日本・アメリカ・フィリピン・マレーシア・中国の5カ国を対象におこなった調査結果の一部を報告しており、他の文化の分析との関係から、このようにサンプル数の少ない項目についても分析対象に含まれている。

邦文参考文献

- 岩脇三良(1994)「異文化間研究の方法論に関する考察」『社会心理学研究』, 10(3), 180-189.
- シーガル M. H.・ダーセンP. R.・ベアリー J. W.・ポーティンガ Y.H. (1995) 田中國夫・谷川賀苗(訳)『比較文化心理学 上巻』北大路書房.
- 高井次郎(1999)「『日本人らしさ』を確認できない比較文化研究」島根國士・寺田元一(編)『国際文化学への招待：衝突する文化，共生する文化』(pp. 101-122) 新評社.
- 高野陽太郎・櫻坂英子(1997)「“日本人の集団主義”と“アメリカ人の個人主義”：

- 通説の再検討」『心理学研究』, 68, 312-327.
- 竹村幸祐・結城雅樹 (2002) 「文化的自己感尺度の問題：準拠集団効果の検討」『日本社会心理学会第43回発表論文集』, 142-143.
- トリアンデイス H. C. (2003) 神山貴弥・藤原武弘 (編訳) 『集団主義と個人主義：2つのレンズを通して読み解く文化』北大路書房.
- 守崎誠一 (2000) 「価値観」西田ひろ子 (編) 『異文化間コミュニケーション入門』 (pp. 132-181) 創元社.
- 守崎誠一 (2004) 「個人主義／集団主義的価値観に関する比較文化研究：日本・アメリカ・中国・フィリピン・マレーシアの社会人と大学生」『Human Communication Studies』, 32, 69-92.
- 守崎誠一 (2006) 「対人コミュニケーション行動の予測・説明変数としての個人主義／集団主義的価値観：日本人大学生とアメリカ人大学生について」『国際行動学研究』, 1, 6-16.

英文参考文献

- Gelfand, M. J., & Holcomb, K. M. (1998). Behavioral patterns of horizontal and vertical individualism and collectivism. In T. M. Singelis (Ed.) *Teaching about culture, ethnicity and diversity*. Thousand Oaks, CA: Sage.
- Gudykunst, W. B., Matsumoto, Y., Ting-Toomey, S., Nishida, T., Kim, K., & Heyman, S. (1996). The influence of cultural individualism-collectivism, self-construal and individual values on communication styles across cultures. *Human Communication Research*, 22, 510-543.
- Heine, S. J., Lehman, D. R., Peng, K., & Greenholtz, J. (2002). What's wrong with cross-cultural comparisons of subjective likert scales?: The reference-group effect. *Journal of Personality and Social Psychology*, 82, 903-918.
- Hofstede, G. (1980). *Culture's consequence: International differences in work-related values*. Beverly Hills CA: Sage.
- Hofstede, G. (1983). Dimension of national cultures in fifty countries and three regions. In J. B. Deregowski, S. Dziurawiec, & R. C. Annis (Eds.), *Expiscations in cross-cultural psychology*. Lisse, Netherlands: Swets and Zeitlinger.
- Hofstede, G. (1991). *Cultures and organizations: Software of the mind*. Berkshire England: McGraw-Hill Book Company Europe.
- Singelis, M. T., Triandis, C. H., Bhawuk, S. D., & Gelfand, J. M.

- (1995). Horizontal and vertical dimensions of individualism and collectivism: A theoretical and measurement refinement. *Cross-Cultural Research*, 29 (3), 241-275.
- Triandis, H. C. (1994). *Culture and social behavior*. New York: McGraw-Hill.
- Triandis, H. C. (1995). *Individualism and collectivism*. Boulder, CO: Westview.
- Triandis, H. C., Bontempo, R., Villareal, M. J., Asai, M., & Lucca, N. (1988). Individualism-collectivism: Cross-cultural perspectives on self-ingroup relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, 54, 323-338.
- Triandis, H. C., & Gelfand, M. J. (1998). Converging measurement of horizontal and vertical individualism and collectivism. *Journal of Personality and Social Psychology*, 74, 1, 118-128.